

2020 年 7 月 26 日（日）「虐げの中で ～慰める者の必要性～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:1-3

1 私は再び太陽の下で行われるあらゆる虐げを見た。

見よ、虐げられる者の涙を。

彼らには慰める者がいなかった。

また、彼らを虐げる者の手には力があつた。

彼らには慰める者がいなかった。

2 今なお生きている人たちよりも、すでに死んだ人たちを私はたたえる。

3 いや、その両者よりも幸せなのは、まだ生まれていない人たちである。

彼らは太陽の下で行われる悪事を見ないで済むのだから。

《新改訳 2017》伝道者の書 4:1-3

1 私は再び、日の下で行われる一切の虐げを見た。

見よ、虐げられている者たちの涙を。

しかし、彼らには慰める者がいない。

彼らを虐げる者たちが権力をふるう。

しかし、彼らには慰める者がいない。

2 いのちがあつて、生きながらえている人よりは、すでに死んだ死人に、私は祝いを申し上げる。

3 また、この両者よりもっと良いのは、今までに存在しなかった者、日の下で行われる悪いわざを見なかった者だ。

【序論】

今日は「虐げ」という重いテーマを扱います。4 章全体を 5 回に分けて学ぶ予定ですが、本章には「交わりの必要性」という一貫したテーマが流れています¹。「虐げ」という事柄は様々なレベルで起きる「虐待」であり、個人が個人を、複数人が個人を、国家が国民を、国家が国家を…という具合に、果てしなく広がりをもつ問題です。あるいは、人間が動物を虐げるというケースもあるでしょう。この世界では、一方において多くの涙が流されているが、他方では人間は信じられないほど無慈悲になりうる存在です。同じ尊厳を持った人間であるはずが、権力、腕力、武力、経済力など様々な「力」によって、ある人がある人を徹底的に虐待するということが起きる。そのような現実を見ながら、どうすることもできない無力さに苦しんでいる人もいます。そう、コヘレトはその現実を見つめ、今日の結論に到達したのです。

¹ 4:1-3 「虐げの中で ～慰める者の必要性～」

4:4-6 「交わりに基づく労働 ～労苦の友の必要性～」

4:7-8 「財の管理者 ～分かち合う友の必要性～」

4:9-12 「人格的交わりの強さ・豊かさ ～同士の必要性～」

4:13-16 「^{きよ}潔き世代交代を目指して ～良き助言者の必要性～」

※以上の分類は奥村の言葉によるものです。

【本論】

本論 1. 虐げの現実

私は再び太陽の下で行われるあらゆる虐げを見た。見よ、虐げられる者の涙を。彼らには慰める者がいなかった。また、彼らを虐げる者の手には力があつた。彼らには慰める者がいなかった。(4:1)

コヘレトは一庶民として、この世で起きている様々な「虐げ」の現実を見ました。「虐げ」という言葉 (אֲשׁוּרָה／アシューキーム) は、「弾圧」「搾取」などと訳すこともできます。本節の後半で「彼らを虐げる者の手には力があつた」と言われているように (直訳:「虐げる者の手から力」)、何らかの意味で「力」を持つ者が弱者を虐げている様子を見聞きしたのでしょう。子どもの世界でも腕力のある者が弱い者いじめをするのは、いつ如何なる時代でも行なわれていることです。大人の世界でも然り、精神を病むほどの過酷な虐げが隠れたところで行なわれています。また、不法な高額請求、法的基準を逸脱した強制労働、言論の自由の統制なども立派な「虐げ」と言えるでしょう。もっと広くは、独裁政権によって、国民が困窮している中、支配者が贅沢三昧をしていることもあります。隣国の状況や、内戦が続いているシリアの情勢などは、現代における「独裁主義」と言うことができるのではないのでしょうか。過去にはフランスのロベスピエール、イングランドのクロムウェル、ドイツのヒトラー、ジンバブエのムガベ、イタリアのムッソリーニ、ソ連のスターリン、ルーマニアのチャウチェスクなど、歴史上に多くの独裁者が現れました。重要なことは、なぜ「独裁者」が世に現れるのかを探り、理解することではないのでしょうか。北海道大学法学研究科教授の吉田徹氏は、『「独裁者」いかにして生まれるのか²』という文書の中で次のように述べています。

《前略》 実際に「独裁者」とは一体どのような人物なのでしょう。「20世紀は独裁の時代だった」と書く著名歴史家フランク・ディコッターは『人はいかに独裁者になるのか』という本の中で、「独裁政治は独裁者の性格から生まれる」という毛沢東の専従医の言葉を引きながら、独裁者はすべからず「弱さ」を抱えた人物である、と指摘します。つまり、独裁者は弱い存在だからこそ、政治で独裁を敷くのだという逆説です。だからこそ、独裁政治は常に肅清や弾圧を伴うことになります。それは彼らが疑心暗鬼に満ち、自らが統治する国民を信頼せず、将来の見通しに不安を抱えていたからだ。

² https://imidas.jp/cinema/1/?article_id=1-84-006-20-03-g452

《中略》 なぜ独裁政治が生まれるのかを心理学的に分析した有名な研究のひとつに『権威主義的パーソナリティ』（1950年）があります。これは、ナチズムの記憶がまだ新しい時代に、人々がなぜ権威主義的になるのか、すなわち独裁的になったり、独裁者に従ったりするのかを最先端の研究手法を用いて説明しようとしたものです。

《中略》 重要視されたのは独裁的傾向を持つ人間の家庭環境でした。彼らは、その人物が幼年期に両親との関係において、階級関係に置かれていた場合、服従と従属が当たり前となり、その自らの体験を自己以外の人物や集団に投影するために独裁的性格を持つようになる、と結論付けています。簡単に言えば、親が子どもに言うことを聞かせようと権威的に振る舞ったり、愛情に欠けたりする行動に出ると、子どもは強い者に対して面従腹背的な態度をとるようになり、自らを律することができず破壊的な衝動に駆られる傾向があるとしたのでした。

この心理的傾向は「妄想性パーソナリティ」と呼ばれることもあります³。「絶対権力を手にした万能感と、いつ裏切り者によって権力の座を奪われるかもしれないという不安が、独裁者の心を蝕んでいく。」「秘密警察の暗躍や裏切り者の粛清は、独裁者の死か失脚まで続く。⁴」自分の身を守るためには、人の命を簡単に犠牲にすることができる。彼らの感覚としては、庶民の命は牛馬のそれと何ら変わらないのかもしれませんが。この独裁的傾向は特に男性に見られがちですが、その背後には父親との関係における問題が潜んでいることが多いそうです。

実際、妄想性パーソナリティ障害の人では、「父親殺し」のテーマが人生を支配していることが少なくない。中には、あからさまに、父親への殺意を口にする者もいるが、多くは、もっと巧妙に昇華され、父親への戦いは、権力や迫害者との戦いに置き換えられる。

スターリンの父親は、飲んだくれの靴職人で、酔っ払っては、妻や息子に暴力を振るう男だった。あるときは、力任せに息子を床に叩きつけたため、何日も血尿が止まらなかった。ぶたれて育ったスターリンは、反抗的で、乱暴で、冷酷で、強情な性格を示し始めていた。少年時代から、ボクシングに熱中し、彼の「殴り」好きは生涯続いた。母親は彼に司祭になってほしかったが、彼は神への信仰を捨て、無神論者として、革命家への道を突き進んでいった⁵。

³ 岡田尊司『パーソナリティ障害』（PHP 新書、2004、第7章）

⁴ 同書 p.181

⁵ 同書 p.183-184

本論 2. 死者の幸い／存在しない者の幸い

古代ローマの皇帝たちにも上記の傾向が見られますが、コヘレトの時代も例外ではありません。「力」を持った者が支配者の座にのし上がっていく世。遡れば、聖書の初期の記録の中にも、権力者の台頭が見出されます。

レメクは妻たちに言った。「アダとツィラよ、私の声を聞きなさい。レメクの妻たちよ、私の言葉に耳を傾けなさい。私は受ける傷のために人を殺し、打ち傷のために若者を殺す。

カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍。」（創世記 4:23-24）

ここには、あらかじめ復讐を誓うレメクの猜疑心がよく現れているでしょう。

クシュはまた、ニムロドをもうけた。ニムロドは地上で最初に勇士となった者である。彼は主の前において勇ましい狩人であった。それゆえこういふことわざがある。「主の前における勇ましい狩人ニムロドのようだ。」彼の王国の初めは、バベル…。（創世記 10:8～）

人類史は常に「力」の前で流された多くの涙の歴史と言えます。そこで、コヘレトはこの変えることのできない現実の前に、このような結論に至っていくのです。

今なお生きている人たちよりも、すでに死んだ人たちを私はたたえる。（4:2）

これは驚くべきアイロニーです。気をつけなくては、身内を亡くしたばかりで悲しみの中にある人を深く傷つける言葉ともなりうるでしょう。新改訳 2017 の訳文は更に辛辣です。

いのちがあって、生きながらえている人よりは、すでに死んだ死人に、私は祝いを申し上げます。（4:2）

コヘレトの言わんとしていることは、こういうことです。もはやこの世の不条理、虐げの現実を見なくて済むようになった人が羨ましい。生きている限り、人はこの現実を見て苦しまなくてはならない。極めて物事を先鋭化させた言い方ではありますが、確かに真理が含まれています。ところが、コヘレトはこれでもまだ言い足りない。

いや、その両者よりも幸せなのは、まだ生まれていない人たちである。彼らは太陽の下で行われる悪事を見ないで済むのだから。（4:3）

文頭の「／ヴェ」という接続詞（一般的には「そして」）をどう訳すかで、雰囲気グッと違ってきます。聖書協会共同訳のように、「いや」と反意語的に訳すと、3節は2節を更に超えていくイメージになります。コヘレトは、生まれてこなかった人は死んだ人よりずっと幸いだと言うのです。死者は人生を全うし、この世の不条理を一定期間見て苦しむ経験をした。しかし、生まれてきさえしていない者は、その難を逃れたのだから、より幸いだ。流産や死産を経験した人の前では安易に言うことのできない台詞です。しかし、コヘレトが言わんとすることも理解できなくはありません。

本論 3. 慰め主の必要性

このように、コヘレトは「太陽の下」（つまり「神なし」）の世界観の行き着く先を徹底的に追求しました。「ああ、死んだ人が羨ましい」「いや、生まれてこない人はもっと羨ましい」と。何という哀しい人生観でしょうか。もしこの思想が全世界を占めたとしたら、人類はどうなってしまうのか。多くの自殺者が出るのではないのでしょうか。

しかし、読者はコヘレトがどこまでも描く厭世的なメッセージの中に、一つの「願い」が現れているのを見逃してはなりません。1 節をもう一度よく読んでみましょう。

私は再び太陽の下で行われるあらゆる虐げを見た。見よ、虐げられる者の涙を。彼らには慰める者がいなかった。また、彼らを虐げる者の手には力があつた。彼らには慰める者がいなかった。

ここには二度も「慰める者」という表現が出てきます。コヘレトが心の底から求めているのは、この悲しみに満ちた世に「慰め主」が来られることなのです。この「慰め主」と出会うことなく、ただ苦しみ抜いて一生を終えていく人々への哀歌とも言えるでしょう。では、コヘレトが待ち望む「慰め主」とはいったい誰なのか。イスラエルの民がアッシリア、バビロニアという大国に捕囚として連れ去られたとき、その状態からの贖いを実現されたのは誰であったか。

「慰めよ、慰めよ、私の民を」と、あなたがたの神は言われる。「エルサレムに優しく語りかけ、これに呼びかけよ。その苦役の時は満ち、その過ちは償われた。そのすべての罪に倍するものを、主の手から受けた」と。（イザヤ 40:1-2）

贖い主なる神との出会い、その苦しみの直中に「慰め」をもたらすことのできる神と出会うことこそ、コヘレトが求めていることなのではないのでしょうか。新約聖書は、このイザヤの預言はイエス・キリストによって成就されたと語ります。

それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が手渡されたので、それを開いて、こう書いてある箇所を見つけられた。「主の霊が私に臨んだ。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、打ちひしがれている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」イエスは巻物を巻き、係の者に返して座られた。会堂にいる皆の目がイエスに注がれた。そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。（ルカ 4:16-21）

福音書に描かれている主イエスの御業、病を癒し、悪霊の支配から解放し、貧しい者に救いの恵みを語られたところに、神の慰めの到来が宣言されていたのです。

【結論】

「コヘレトの言葉」は、読み方を誤りますと、読者は本当に何の希望もない世界観に巻き込まれて終わってしまう危険性をもつ書です。しかし、そこに含まれている真理を認めつつも、本書の所々に登場する神の存在を見落としてはなりません。そして、コヘレト自身が待ち望んでいた「贖い主」は、イエス・キリストの到来によって成就したという新約聖書の光に照らして、私たちは本書を読むことができます。旧約聖書をあまりに新約的に読みすぎることには注意しなくてはなりませんが（基本的に、旧約は旧約の味わいを大切にすべきだと思います）、コヘレトが常に人の人生が永遠とのつながりをもつべきだと訴えているとすれば、キリストが地上にもたらした「神の国（支配）」に生きうる人生とは、まさに彼が求めていた「慰め」であると言えるでしょう。

そして、私は玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となる。神自ら人と共にいて、その神となり、目から涙をことごとく拭い去ってください。もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない。最初のものが過ぎ去ったからである。」（黙示録 21:3）

神は「インマヌエル」である。この悲惨な地上の営みの中に「神共にいまし」が現実となる。主イエスはその「慰め」をもたらすために世に来られたのです。

- ・ 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」これは、「神は私たちと共におられる」という意味である。（マタイ 1:23）
- ・ 今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。（ルカ 2:11）

【祈り】

慰め主なるイエス・キリストの父なる神様。コヘレトが語るように、この世界には多くの涙があります。今日は、その涙の中でもとりわけ胸の痛む「虐げ」について考えました。もし正しい審き主、慰め主なる神がおられないなら、これほど不条理な世に生まれてくる意味とは一体何でしょう。ひたすら涙を流して人生を終えていく人がいます。その涙を踏みにじって生きている人がいます。しかし、この世に主は来られました。神が人となり、人の間に住まわれました。そして、世の終わりには、この方が再び来られると約束されています。すべてを正しく審く方として、そしてすべての涙を拭く方として。私たちにも、この世界に慰めを宣べ伝えさせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人の世に蔓延る虐げを見逃すことなく、悲しむ者の涙に目を留め給う、父なる神の愛、
待望の「慰め主」として世に来たり、病人を癒し、悪霊から解放し、貧しい者に救いを
語り給うた、主イエス・キリストの恵み、

新天新地のみにあらず、現在においてインマヌエルを実現させ給う、聖霊の親しき交わ
りが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。